テーベ岩窟墓第46号墓（ラーメスの墓）
に関する一考察

On the Date of the ‘Steward of the Temple
of Aten’ Ramose and His Tomb (TT 46)
in the Theban Necropolis

河合 望^{*}
KAWAI Nozomu

ABSTRACT In the *Topographical Bibliography* by Porter and Moss, the tomb of Ramose (TT 46) is listed as probably belonging to “the time of Amenhotep III (?)”. This tomb was first recorded by John Gardner Wilkinson in the 19th Century. On the basis of Wilkinson’s manuscript, Helck gave some of Ramose’s titles in *Urkunden* IV. Graefe later published a brief communication concerning Ramose’s titles based on this limited information. In 1991 Bohleke assumed that Ramose’s career and tomb should date to the reigns of Tutankhamun, Ay, and perhaps, the first year of Horemheb. Most recently, Kampp discussed tomb 46, mainly focusing on architecture. She dates TT 46 to the reigns of Amenhotep III and Amenhotep IV, with Ramose as the usurper of a tomb originally constructed for someone from the end of the Seventeenth Dynasty to the beginning of the Eighteenth Dynasty.

As a part of my study on the reign of Tutankhamun, I had the opportunity to visit the tombs of officials active during the reigns of Tutankhamun and his successors from the late Eighteenth Dynasty in the Theban Necropolis. A certain Ramose who has the title of Overseer of Granaries of Upper and Lower Egypt is mentioned in the year 3 stela of King Ay from Giza. Since Ramose, the owner of TT 46, also has the title of Overseer of Granaries of Upper and Lower Egypt, the tomb and the stela seem to refer to the same person, and thus the generally accepted date of Ramose’s tomb seems to be questionable. During my study of TT 46, it became clear that

* ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士候補／早稲田大学エジプト学研究所客員研究員
Ph. D. Candidate, Johns Hopkins University/Visiting Fellow, Institute of Egyptology,
Waseda University

this is a tomb from the post-Amarna period for the following reasons: 1. Ramose held the titles of the Steward of the temple of Aten as well as the High Priest of Amun in *Mn-st* at the same time. The names of Amun were not expunged at all but those of Aten were clearly chiseled out on the tomb walls. This strongly indicates the tomb was decorated after the Amarna period. 2. The artistic style also suggests that the tomb was decorated in the post-Amarna period. 3. A headless block statue of Ramose, Overseer of Double Granaries, may support this date. 4. Since it is known that Khaemhat was the Overseer of Granaries during the later part of the reign of Amenhotep III, Ramose could not have served as the Overseer of Double Granaries of Upper and Lower Egypt at that period.

Therefore, it is likely that Ramose served in the post-Amarna period, most probably under Tutankhamun as well as Ay, as the Overseer of Granaries of Upper and Lower Egypt, Steward of the Temple of the Aten, and High Priest of Amun in *Mn-st*. If so, his titulary provides the first Theban evidence that the temple of Aten was still functioning even after the Amarna period, supplementing the contemporary evidence from the Memphite necropolis.

は じ め に

テーベ西岸は新王国時代において高官の墓域として広大なネクロポリスを形成していたことで知られている。特に第18王朝のアメンヘテプIII世の治世までに数多くの岩窟墓が造営されたが、アクエンアテン王によるアマルナ遷都により一時的に造墓活動が途絶えた。トットアंकアメン王の治世になると行政の中心地メンフィスのネクロポリスを中心に高官の墓が造営され、⁽¹⁾ テーベでの造墓活動は以前ほど活発ではないが再開される。

新王国時代のテーベに造営された墓のなかでも TT 46 (第46号墓)⁽²⁾ は、従来アメンヘテプIII世の治世に比定されていたが、この墓の被葬者ラーメス (*Ramses*) は「上下エジプト穀倉長」の称号を持ち、同じ称号をもつ同名の人物がアイ王の治世第3年に記録されたステラに認められる。⁽³⁾ 彼らが同一人物であるとする⁽⁴⁾ と墓の造営時期の再検討が必要であると言える。

筆者はトットアंकアメン王時代の行政組織や高官の業績、墓域の展開を研究する目的で、同王時代を含むポスト・アマルナ時代⁽⁴⁾ に造営されたテーベ西岸

の岩窟墓を観察する機会を持ったが⁽⁵⁾、その際に TT 46 を実際に訪れ、詳細に観察することができた。この観察およびその他関連資料の検討から、ラーメスが実際はポスト・アマルナ時代に年代付けられるとの結論を得るとともに、ラーメスの家族についての新たな情報を得ることもできた。本稿ではこれらにもとづき、TT 46 とその被葬者ラーメスについて考察したい。

I. 研 究 史

テーベ西岸第46号墓（図1，図2）は、シェイク・アブド・アル＝クルナの丘のはほぼ中央に位置する。墓の正面は石灰岩の岩盤を整形した6本の角柱と2本の半角柱からなるポルティコを形成しているが、後世に泥煉瓦と泥漆喰で閉塞されたようである。墓内部は東西に伸びる前室を持ち、そこから中央に奥室に向かって左右対称に7本の柱がある。本来は8本作る予定だったと思われるが、7本目の途中で未完成になっている。奥室の中央には壁龕が穿たれており、北西角には埋葬室に繋がるシャフトが掘られている。なお、シャフトの内部は未発掘である。TT 46 の外観は比較的目立ち、遠方から眺めてもその存在が明瞭にわかるが、これまで組織的な発掘調査は実施されておらず、報告書も刊行されていない。

この墓を最初に記録したのは、19世紀の J. G. ウィルキンソン (J. G. Wilkinson⁽⁶⁾) であり、彼の手記が現在のところ唯一のまとまった資料である。その後ガーディナー (A. H. Gardiner) やウェイゴール (A. Weigall) が墓を訪れ、アメンヘテプIII世期 (?) の墓であると年代付けた⁽⁷⁾。ポーターとモス (B. Porter & R. Moss⁽⁸⁾) の *Topographical Bibliography* も、この年代を受け入れている。これに対し、ヘルク (W. Helck) は *Urkunden* の中で、TT 46 をアメンヘテプIV世の初期の墓としてラーメスの称号を記載している⁽⁹⁾。また N. G. デイウィス (N. de G. Davies⁽¹⁰⁾) も手記を残し、アメンヘテプIII世およびIV世治下の墓であるとしている⁽¹¹⁾。これらの年代決定の主な根拠はラーメスの称号にアテン神とアメン神に関わる称号が同時に確認されることであり、アメンヘテプIII世とアメンヘテプIV世の共同統治期に属する墓と推測されたものと思われる⁽¹²⁾。

1979年、グレーフェ (E. Graefe) は前述のウィルキンソンの手記を再検討し、ラーメスがアテン神とアメン神の称号を同時に持っていることから、この人物の年代比定に関してアマルナ時代以前と以後の二つの可能性を述べ、ウィルキ

ンソンの手記に残された不明瞭なカルトゥーシュの最初に見られる「ラー」のサインの解読が年代決定の手懸りになるとしているが、明確な主張はしていない。⁽¹³⁾

1991年にはボーレケ (B. Bohleke) が、その博士論文の中で、これまでの資料を再検討し、ラーメスをトゥトアंकアメン王、アイ王、さらにホルエムヘブ王の治世初期まで仕えた高官であるとしている。⁽¹⁴⁾

1998年にはカンプ (F. Kampp) が、テーベ・ネクロポリスの包括的な研究 *Die Thebanische Nekropole* の中で墓のプラン、エレベーションの略図と基本的な情報をまとめているが、彼女は、TT 46 はまず第17王朝末か第18王朝初期に造営され、その後、アメンヘテプIII世およびアメンヘテプIV世の治世にラーメスの墓として再利用されたとしている。⁽¹⁵⁾

II. 被葬者ラーメスをめぐって

Topographical Bibliography によれば、ラーメスは「家令」および「上下エジプトの穀倉長」の称号を持っていたとされるが、⁽¹⁶⁾ヘルクの *Urkunden* には、「真の王の書記」,⁽¹⁷⁾「アテン神殿の家令」,⁽¹⁷⁾「右手の扇持ち」,⁽¹⁷⁾「上下エジプト穀倉長」の称号が記されている。これらに加え、ウィルキンソンの手記には「既の監督官」,⁽¹⁷⁾「メン・セトのアメン大司祭」の称号も記されている。筆者の第46号墓の観察の結果、確認できたラーメスの称号は以下のとおりである。

1. *sš-nswt m}*^(c) *mr. f* 「彼が愛する真の王の書記」
2. *sš-nswt* 「王の書記」
3. *ḥy ḥw nswt ḥr wnmy* 「王の右手の扇持ち」
4. *imy-r pr* 「家令」
5. *imy-r pr m t} ḥwt p} 'Itn* 「アテン神殿の家令」
6. *ḥm-nṯr tpy n 'Imn m Mn-st* 「メン・セトのアメン大司祭」
7. *imy-r ssmwt n nb t}wy* 「二国の主の既の監督官」
8. *imy-r šnwty* 「穀倉長」
9. *imy-r šnwty nw rsw mḥw* 「上下エジプト穀倉長」

おもな形容辞

ḥsy n ḥmt-ntr Tḥ-ms Nfrt-iry「神の妻イアフメス・ネフェルトイリに称えられしもの」

以上の称号は、明らかにラーメスが、アメン神とアテン神が並存していた時代の人物であることを示している。近年のサッカーラにおける新王国時代の墓地の発掘では、トゥトアंकアメン王時代の「アメン牧牛長」イニウイアの息子ラーメスとパ・インヘリが「アテン神殿の宝庫の書記」の称号を有していたことが明らかになっている。さらに、2001年には、トゥトアंकアメン王時代の⁽¹⁸⁾アテン大司祭メリネイトの墓が発見された。⁽¹⁹⁾これらの証拠は、前述のようにポスト・アマルナ時代においてもしばらくはアテン神殿が機能していたことを示唆する。テーベのアテン神殿はアクエンアテン王がアメンヘテプIV世と名乗っていた治世初期に建設が開始された。また、当時神殿に使えていた役人の名前も知られている。⁽²⁰⁾アクエンアテン王の死後、トゥトアंकアメン王の治世において、アテン神殿の建材のタラタートが再利用されたことが近年明らかになっているが、カルナクのアテン神殿が本格的に解体されたのはホルエムヘブ王の治世であり、それまでは機能していたと考えられる。⁽²²⁾ラーメスの称号「アテン神殿の家令」はアクエンアテン王の死後、テーベでもアテン神殿がしばらくの間機能していたことを示すことになる。

「アテン神殿の家令」と並立に表記されている称号「メン・セトのアメン大司祭」と形容辞「神の妻、イアフメス・ネフェルトイリに称えられしもの」は第18王朝初期のアメンヘテプI世の妻で、神格化されたイアフメス・ネフェルトイリの祭祀にラーメスが関わっていたことを示している。メン・セトはテーベ西岸のイアフメス・ネフェルトイリの記念神殿を指し、位置的には東岸のカルナク、アメン大神殿とナイル川を挟んで対になる。イアフメス・ネフェルトイリの祭祀はポスト・アマルナ時代においてもテーベ西岸で普及し、同時代のネフェルヘテプ(TT 49)もイアフメス・ネフェルトイリとアメンヘテプI世を⁽²⁴⁾礼拝する図を墓に描いている。

「上下エジプト穀倉長」という称号は、*ḥty*「宰相」、*imy-r ḥtm*「財務長官」、*imy-r pr wr*⁽²⁵⁾「大家令」に次いで重要な行政官職である。「上下エジプト穀倉長」はエジプト全土からの租税として穀物の徴収・記録・再分配を担当する官職で、これまで知られているアメンヘテプIII世時代の「上下エジプト穀倉長」には、

シェイク・アブド・アル＝クルナに墓 (TT 57) があるカエムハトがいる。カエムハトはアメンヘテプⅢ世の治世第34年の第2回セド祭と治世第37年の第3回セド祭に参加した記録があり、彼がアメンヘテプⅢ世の治世の最末期まで、「上下エジプト穀倉長」の職務にあたっていたことが判明している⁽²⁶⁾。したがって、ラーメスがアメンヘテプⅢ世の治世における「上下エジプト穀倉長」であったとする Porter & Moss の記述は受け入れがたい。

さらに、ラーメスがポスト・アマルナ時代の人物であることを裏付ける証拠として、カイロ博物館に収蔵されているアイ王治世第3年のステラ⁽²⁷⁾ (図6) がある。このステラは、アル＝ギーザにあるクフ王の王妃のピラミッド南端に位置していたイシス神殿に奉納されたもので、アイ王が治世の第3年に、ある新婚夫婦に対し贈物として領地を下賜したことが記されている。154アローラの土地区画を決定した後、領地の提供にあたる責任者の名前が記述されており、その中に *sš-nswt* 「王の書記」、*imy-r šnwty* 「穀倉長」ラーメスとその部下の書記メリラー、チャイらの名がある。同様の任務はアメンヘテプⅢ世時代の「上下エジプト穀倉長」であったカエムハトの墓 (TT 45) にも描かれており、テーベ第46号墓のラーメスと同一称号を持つラーメスが他に見当たらないことから、同一人物であることはほぼ間違いないものと思われる。

また、*sš-nswt* 「王の書記」、*imy-r pr wr* 「⁽²⁸⁾大家令」、*imy-r šnwty* 「穀倉長」の称号を持つラーメスなる人物の方形彫像がある。これはテーベ出土とされているが、正確な出土場所はわかっていない。年代は第19王朝から第20王朝に比定されている。頭部が欠損しているため、顔の特徴からの年代決定は困難であるが、シュルツ (R. Schultz) によれば、中央にハトホル女神を象ったシストラムが彫られている方形彫像はラメセス朝に比定されるという⁽²⁹⁾。しかしながら、ラメセス朝にラーメスという名の「穀倉長」は他に確認されていない。ポスト・アマルナ時代の美術は第18王朝の古典様式からラメセス朝の様式への移行期に位置付けられるので、この方形彫像のラーメスが TT 46 の被葬者と同一人物である可能性は排除できない。

最後にラーメスの家族 (図7) について若干の考察をしたい。ラーメスの妻の名はネフェルトカア (*Nfrt-hꜣ*) であり、*šm-yt n 'Imn* 「アメン神の歌い手」、*nbt pr* 「家の女主人」の称号とともに *hsyt n Hwt-Hr* 「ハトホル神に称えられしもの」の形容辞を持つ。彼女の「アメン神の歌い手」の称号のアメン神名は削

除されていない。彼女以外に妻の名前が認められないので、ラーメスの妻は彼女一人であったと思われる。ラーメスとネフェルトカアの間には2人の息子と3人の娘がいたことが墓壁画と碑文から明らかである。

息子イウ (*'Iw*) は *sš-nswt m}{ mr. f*「彼が愛する真の王の書記」および *imy-r mš{ n nb t}wy*「二国の主の將軍」である。他の同時代の碑文資料には彼の言及は見当たらない。ランケ (H. Ranke) によれば、この名前は古王国時代と中王国時代に類例があるだけである。⁽³⁰⁾ 2番目の息子アイ (*'Iy*) は、*sš-nswt m}{ mr. f*「彼が愛する真の王の書記」および *ḥm-nṯr n 'Imn*「アメン神のへム・ネチエル神官」であり、壁画には豹の毛皮に星辰の柄の衣装を纏ったセム神官の姿で描かれている。彼の称号に含まれるアメン神名も削除されていない。神官として父の埋葬と祭祀に携わった息子の称号においてアメン神の名が無傷のままであったということは、ラーメスがポスト・アマルナ時代に世を去ったことを示唆している。息子アイがアメン神官である事実も、ラーメスがポスト・アマルナ時代の人物であったことを補完するものと考えられる。

ラーメスの3人の娘の名前は2名しか確認されず、銘文が最も明瞭なのは三女と思われるテイ (*tly*) で、「家の女主人」と「アメン神の歌い手」の称号を持つ。次女はトゥイ (*twy*) と読めるが、称号は判読不可能である。

ラーメスとその家族の像の顔面部は墓全体にわたって人為的に消されている。これはおそらくラーメスがアテン神殿の経営に関わっていたからであり、前述のアテン神名の削除と同時期に実施されたものと思われる。

III. 第46号墓の造営年代について

① 第1期

第46号墓の造営年代は、キャンプが既に指摘しているように2期あったと考えられる⁽³¹⁾。墓の本来のプランは正面に6本の角柱と2本の半角柱のポルティコを持つT字型で、横長矩形の奥室の西側に埋葬室につながるシャフトを穿ったプランであったと思われる。その根拠としては、墓内部の前室と奥室の間の列柱は後に拡張され、本来は単純な通廊であったことが明瞭であること、列柱の奥にある奥室の面積が横に広いこと、角柱のポルティコを正面に備えた墓は第18王朝中期以降には採用されていないことが挙げられる。正面に角柱のポルティコとT字型のプランを持つ墓は、所謂「サフ墓」⁽³²⁾として中王国時代以来

テーベ・ネクロポリスで普及した型式であり、同墓の位置するシェイク・アブド・アル＝クルナの丘には同型式の墓が多く造営されている。⁽³³⁾ これまで18王朝初期における同型式の岩窟墓は、中王国時代の岩窟墓を模倣して造営されたと考えられていたが、⁽³⁴⁾ ジョベク (E. Dziobek) は、実際それらの墓は中王国時代に造営されたもので、⁽³⁵⁾ 第18王朝に再利用されたと指摘している。彼は特にイネニの墓 (TT 81) を例に挙げ、第18王朝初期の岩窟墓の成立について考察しているが、イネニの墓は6本の角柱と2本の半角柱を正面ポルティコに備え、中央に奥室に繋がる通廊を備えていることから、TT 46 の第1期のプランとほぼ同じプランであることが指摘できよう。さらに、ロエリグ (C. H. Roerig) は、中王国時代のシェイク・アブド・アル＝クルナの丘における岩窟墓の分布図を作成し、⁽³⁶⁾ TT 46 を中王国時代に造営された墓に含めている。

これに対しカンブは、TT 46 を第17王朝末か第18王朝初期に造営されたもの⁽³⁷⁾ としている。カンブによれば、中王国時代におけるテーベの岩窟墓の型式は正面に角柱を備えたポルティコを持ち、中央通廊から正方形の奥室に繋がるタイプ (類型Ⅲ) であり、第18王朝中期の型式は角柱のポルティコは持たず、入口から横長の前室があり、中央通廊から奥室に繋がるタイプ (類型Ⅴ) であるという。そして、TT 46 はそれらの中間型式にあたる類型Ⅳb⁽³⁸⁾ に属するため、第17王朝末から第18王朝初期に年代づけられるという。特にポルティコから中央通廊への入口が狭くなっていることも、この墓が中王国時代のものでないことを示唆する。⁽³⁹⁾ また、カンブによれば、この型式の墓の年代は、墓内の文字資料からも裏付けられ、第17王朝の墓域があったドゥラ・アブー・アル＝ナガ地区に多く、⁽⁴⁰⁾ 第18王朝に比定される数基がシェイク・アブド・アル＝クルナ地区に散在するという。

このように、TT 46 のように角柱のポルティコを備えた第18王朝初期のテーベ岩窟墓の成立については、中王国時代の再利用であるとする説と、中王国時代以来のテーベにおける「サフ墓」が第17王朝末から第18王朝にかけて発展したものとする説の2つに意見が分かれるようである。ジョベクは、イネニの墓におけるポルティコの各角柱の間が日乾煉瓦と泥漆喰で封鎖されていることを指摘、本来彼の墓であればそのような処理はしないと主張し、再利用の根拠に⁽⁴¹⁾ している。TT 46 は彼が作成した第18王朝初期の再利用墓のリストから省かれているが、彼が例にあげた数基の墓と同様に、ポルティコの角柱の間が日乾煉

瓦と泥漆喰で封鎖されている。しかし、TT 46 の場合は中央通廊の正面も閉塞されているため、おそらく第18王朝に封鎖されたというよりは、むしろそれ以降の時代に封鎖されたものと推定される。墓の内部にはコプト時代に記されたと思われる十字架の落書きが認められ、墓の上部にも同時代の煉瓦構造の一部と考えられるものがあるため、筆者は、これらはコプト時代に再利用された痕であり、墓のポルティコの封鎖もその頃に施されたものと判断している。したがって、第1期と、ラーメスの時代の第2期も墓の正面ポルティコが開口した状態だったのではなかろうか。すなわちカンパが指摘するように、正面に角柱のポルティコを備える墓は中王国時代だけの型式だけではなく、第18王朝初期においても発展形態として存続していたと考えられる。ジョベクの論拠は遺構全体のコンテキストの中で再検討する必要がある、封鎖に使用した煉瓦の年代も詳細に調べる必要があろう。本稿は、第18王朝初期の岩窟墓の形態についての論考を目的としていないが、筆者はカンパが主張するように、第46号墓は最初に第17王朝末あるいは第18王朝初期に造営された可能性が高いと考える。

② 第2期

TT 46 が再利用された第2期は言うまでもなく、ラーメスによる再利用の時期である。墓の平面図(図2)から明らかなように、ラーメスの時期に墓の中央の前室から奥室にかけての中央通廊の両側に柱が作られ内部構造が拡張された。最終的には6本の柱が完成し、7本目の柱が切り出され、8本目の柱を作る予定であったと思われるが、未完成に終わっている。現在では完成した6本の柱のうち、奥の西側の柱が崩壊しているが、残りの5本の柱には中央通路側とその両側面に壁画が施されている。柱外側の部屋の壁面にはプラスターの痕があり、おそらく本来は表面整形が施されたと思われるが、現在では壁面がほとんど崩落している。前室では東端部の柱の北面に壁画が残され、西端部の南面にレリーフ(図3)がそれぞれ施されている。また中央通廊開口部の天井付近には太陽円盤を頂くケケル・フリーズの跡が確認され、天井にはジグザグ紋が部分的に残存している。奥室に関しては中央の壁龕に装飾が残され、壁龕横の東側の壁に壁画が残存している。TT 46 のように岩窟墓内部の中央通廊両脇に柱を多数作る型式はラメセス朝に多く、カンパはこの型式の墓を類型VII c と⁽⁴²⁾しており、TT 46 をその中に含めている。しかし、アメンヘテプIII世時代の大

型岩窟墓にも宰相ラーメスの墓 (TT 55), アメンヘテプ・スレルの墓 (TT 48), ケルエフ (TT 192) などのように中央通廊両脇に柱を備えるものがある。このような特徴をもつ墓は古くてもアメンヘテプⅢ世の治世のもので、ラメセス朝を通じて見る可以说是と言える。

さて、問題の被葬者ラーメスの年代であるが、まず碑文資料から見ていくことにする。グレーフェは墓内部の柱の壁面に記された王のカルトゥーシュの解読が年代決定の鍵になるとしているが、筆者が観察した限りでは、カルトゥーシュはほぼ欠損状態にあり、かろうじて太陽円盤ラー (R^1) のサインが読める程度であり、これを年代決定の証拠とするのは不可能である。

これまでラーメスはアメンヘテプⅢ世あるいは、同王およびアメンヘテプⅣ世の治下の人物であるとする説が主流である。その根拠としてはアメン神とアテン神に関わる称号が同時に記されていることが指摘されているが、筆者の観察では墓内部の碑文のアメン神名は削られておらず、アテン神名だけが削られている。カンブによればデイヴィスの手記にラーメスの称号である *imy-r pr m t} hwt p} 'Imn nb-ntrw* 「神々の王, アメンの神殿の家令」の碑文が *imy-r pr m t} hwt p} 'Itn* 「アテン神殿の家令」に書きかえられているとの記述があるとされるが⁽⁴³⁾, 実際にそのように改竄された痕はなく, 明らかに *imy-r pr m t} hwt p} 'Itn* 「アテン神殿の家令」の記述が確認できる前室西端部の北壁にはアテン神の名前が縦に削られた痕が観察できる⁽⁴⁴⁾ (図3)。また, 同東端部の柱にも *imy-r pr m t} hwt p} //* 「……神殿の家令」とあり, 同じ壁に記されたアメン神の名が破壊を受けずに残されていることから, アテン神の名前が削除されたと考えられる。アクエンアテン王の治世には, アメン神信仰排斥のため, エジプト全土の記念建造物や墓でアメン神の名前が削除された。テーベ・ネクロポリスも例外ではなく, 多くの墓でアメン神名が削られている。アテン神は, アマルナ宗教改革の挫折により, 主神としての地位は退いたものの, アクエンアテン王の死後もしばらく崇拝されていたようであり⁽⁴⁵⁾, メンフィスのアテン神殿は第19王朝のセティⅠ世の治世まで存続していたことが明らかである。アテン神信仰に関連する記念物の本格的な破壊活動が開始されたのは, ホルエムヘブ王の治世とされる。したがって, TT 46 に認められるアテン神名の削除は, おそらくホルエムヘブ王の治世以降に実施されたものと考えてよからう。では何故アメン神の名前が削られていないのであろうか。もし TT 46 がアマルナ時代以

後に装飾されたのであれば、アメン神名は破壊を受けるはずはなく、この疑問に説明がつくのである。

墓内部の壁画資料も年代決定の証拠となる。壁面には白の背景色と青色の銘文、そして天井付近の銘文帯には黄色の背景色と青色の文字が採用され、壁画の色調は第18王朝初期からの伝統を踏襲している。しかしながら、太陽円盤をもつケケル・フリーズは宰相ラーメスの墓をはじめ、アメンヘテプⅢ世時代以降の墓におけるケケル・フリーズの特徴であり、王墓でもホルエムヘブ王墓(KV 57)やラメセスⅠ世王墓(KV 16)で採用されている。墓の壁面に描かれたラーメスとその家族の人物像はアマルナ美術の影響も色濃く残しており、同墓が第18王朝の末期に再利用されたことはほぼ疑いがない。特に、ラーメスの頭部はやや長めであり、首にはアマルナ時代から特徴的な2本の皺が看取される。衣服は非常に細かいプリーツの入ったキルトで表現されており、腹部の膨らみが強調されている(図4)。また頭部はやや細長く描写されている。アメンヘテプⅣ世時代のテーベの代表的な貴族墓にはケルエフ(TT 192)、ラーメス(TT 55)、パレンネフェル(TT 182)の墓があるが、TT 46の人物像と比較するとアメンヘテプⅢ世時代の様式から脱しきれておらず、比較的規範に近い様式を保っているように思われる。またそれらの墓が壁画でなくレリーフを採用していることも特徴の違いを生んでいる。TT 46の図像はむしろ、ポスト・アマルナ時代のネフェルヘテプの墓(TT 49)やアメンヘテプ・フィの墓(TT 40)の壁画の人物像表現に類似している。なかでも、ラーメスの3人の娘はそれぞれ頭に冠を戴き、プリーツの細かい長い衣装を纏い、右手にシストラムを持ち、左手で礼拝する姿で柱に描かれていおり、長女と思われる先頭の女性の姿がもっとも大きく描かれ、次女、三女と姿が小さくなるように描かれているが、これはアマルナの岩窟墓に描かれたアクエンアテン王の王女の描かれ方に類似している。またこれらの娘の姿や髪型の描写は、ネフェルヘテプの墓(TT 49)のものとも近似している。⁽⁴⁹⁾

奥室正面の右壁にはラーメスがキオスクの中に座るオシリス神に供物を捧げる図(図5)が描かれているが、ストラドウィック(N. Strudwick)が指摘するようにオシリス神の図像はアマルナ時代以降顕著になった。⁽⁵⁰⁾ またオシリス神の前にある供物台はアマルナ時代以前の第18王朝のものよりも入念で豪華であり、燔祭も含まれている。アマルナのアテン大司祭メリラーの墓に描かれたア

クエンアテン王がアテン神に捧げる供物台は TT 46 の供物台に類似してい⁽⁵¹⁾
るが、これもアマルナ時代以降のテーベの貴族墓における壁画の特徴である。⁽⁵²⁾

また、供物台の下に描かれたアンフォラ壺には、肩の部分と胴の部分に花飾りが付けられているが、これも第18王朝末期以降の特徴である。

以上の点から、TT 46 の第 2 期はアマルナ時代以降に再利用されたと筆者は考える。

IV. 結 論

以上の考察を要約し、結論としたい。まず、テーベ岩窟墓 TT 46 はおそらく第17王朝末から第18王朝初期に造営され、第18王朝末にラーメスの墓として再利用されたことが推測された。また、第46号墓のラーメスは碑文、美術様式等の検討から、これまで指摘されていたアメンヘテプⅢ世あるいはⅣ世の治下の人物というよりは、むしろポスト・アマルナ時代のトゥトアंकアメン王およびアイ王の治下で「上下エジプト穀倉長」などの要職に就いた人物であった可能性が高い。この説はアル＝ギーザ出土のアイ王第3年のステラや息子アイがアメン神官である事実からも補完される。このことは、資料の少ないテーベにおけるポスト・アマルナ時代の貴族墓に新たな資料を追加することになるだけでなく、アクエンアテン王の死後、メンフィスだけでなくテーベにおいてもアテン神殿が機能していたことを示す証拠を提供するものである。

付 記

本稿は2001年に筆者がアメリカン・リサーチセンター特別研究員としてエジプト、ルクソール西岸・アル＝クルナ村で実施した研究の成果の一部である。研究奨励金を交付して下さった American Research Center in Egypt および Samuel H. Kress Foundation に感謝致します。また、遺跡調査の許可を下されたエジプト考古最高会議 (Supreme Council of Antiquities) 長官ガバツラ・アリ・ガバツラ博士 (当時) および考古最高会議のメンバー、現地でお世話になったルクソールおよび上エジプト遺跡の最高責任者サブリ・アブデル＝アジーズ氏 (当時、現エジプト遺跡総局長)、ルクソール西岸遺跡事務所所長ムハンマド・ベアリー氏、査察官エッズ・アル＝ディーン氏に感謝致します。

そして、本稿は2002年4月にボルティモアのジョンズ・ホプキンス大学で開催されたアメリカン・リサーチセンター第53回大会で発表した原稿に加筆修正したものである。

現地研究の際および本稿を草するにあたって貴重なご教示を下されたジョンズ・ホプキンス大学のベッツイ・ブライアン教授に感謝致します。また、常に筆者にたいし激励

を惜まず、貴重なご指導を下さっている早稲田大学の吉村作治教授と草稿を閲読し、貴重なご教示を下された近藤二郎助教授に感謝致します。

最後に、筆者に貴重な情報を提供して下さいたレイモンド・ジョンソン博士（ルクソール、シカゴハウス所長）、ブライアント・ボーレケ博士（シカゴハウス）、リチャード・ファッジーニ博士（ブルックリン美術館古代エジプト室長）、ヤコブス・ファンダイク博士（グローニンゲン大学）に感謝致します。

注

略号は、*Lexikon der Ägyptologie* および *Annual Egyptological Bibliography* に従った。

- (1) メンフィスのネクロポリスに関しては、J. van Dijk, “Development of the Memphite necropolis in the post Amarna Period,” in A.-P. Zivie (ed.), *Memphis et ses necropoles au Nouvel Empire*, Paris, 1988, 37-46.; G. T. Martin, “Memphis: the status of a residence city in the Eighteenth Dynasty,” in M. Bárta and J. Krečí (eds.), *Abusir and Saqqara in the year 2000*, Prague, 2000, 99-120. を参照。
- (2) TT とは Theban Tomb の略号である。
- (3) W. Helck, *Urkunden* IV, 2109-2110, 4.
- (4) ポスト・アマルナ時代とはいわゆるアマルナ時代以降の第18王朝末期を指す。
- (5) テーベ西岸における他のポスト・アマルナ時代の岩窟墓については稿を改めて考察する予定である。
- (6) J. G. Wilkinson, MS V, 74-75. (オックスフォード大学グリフィス研究所蔵)
- (7) S. R. K. Glanville, “Some Notes on Material for the Reign of Amenphis III,” *JEA* 15 (1929), 6, n. 1. なお、ガーディナーの手記のコピーは、ベッツィ・ブライアン教授に閲覧させて頂いた。ここに記して、感謝したい。
- (8) *PM* I², 86-87.
- (9) 称号の日本語表記に関しては、屋形禎亮「エジプト第18王朝における神官任命ー王の任命権と神官団一」『東京教育大学文学部紀要・史学研究』76（1970年3月）を参考にした。
- (10) Helck, *Urkunden* IV, 1995, 10-14.; Helck, *Zur Verwaltung des Mittleren und Neuen Reiches*, Leiden, 1958, 390-391, 500. (以下、*Verwaltung* と略記。) しかしながら、Helck はこのラーメスがアル＝ギーザ出土のアイの治世第3年のステラに認められることを記している。
- (11) Davies, MSS 11, 1.
- (12) 近年では、アメンヘテプIII世とIV世の共同統治を支持する研究者は少数派である。たとえば、近年 Raymond Jonson は12年の共同統治説を主張している。W. R. Johnson, “Images of Amenhotep III in Thebes: Style and Intentions,” in L. M. Berman (ed.), *The Art of Amenhotep III: Art Historical Analysis*, Cleveland, 26-46. を参照。
- (13) E. Graefe, “Bemerkungen zu Ramose, dem Besitzer von TT 46,” *GM* 33 (1979),

- 13-15.
- (14) B. Bohleke, *The Overseers of Double Granaries of Upper and Lower Egypt in the Egyptian New Kingdom, 1570-1085 B. C.* (Ph. D. Dissertation, Yale University), 1991, 244-249.
- (15) F. Kampp, *Die Thebanische Nekropole, zum Wandel des Garbgedankens von der XVIII bis zur XX Dynastie*, Theben 13, Mainz am Rhein, 1996, 244-247.
- (16) *PM* I², 86.
- (17) 注 3 を参照。
- (18) H. D. Schneider, "The Tomb of Iniua: Preliminary Report on the Saqqara Excavations, 1993," *JEA* 79 (1993), 7-8.
- (19) M. Raven, "The Tomb of Merineith at Saqqara," *Egyptian Archaeology* 20 (Spring 2002), 26-28.
- (20) 例えば、テーベ・ネクロポリスに埋葬されたハティアイは *imy-r šnwnty n t| hwt p| 'Itn* 「アテン神殿の穀倉長」を持っている。G. Daressy, "Rapport sur la Trouvaille de , *ASAE* 2 (1902), 2-4 を参照。
- (22) W. R. Johnson によれば、トウトアंकアメン王の治世にすでにカルナクのアテン神殿のタラタートが再利用されたことが明らかであるが、テーベのアテン神殿も少なくともセティ I 世の治世まで存続していたという (Personal communication)。
- (23) メン・セト (*Mn-st*) については, M. Gitton, *L'Épouse du dieu Ahmes Néfertary*, Paris, 1975, 18-19, 76-73 を参照。
- (24) N. de G. Davies, *The Tomb of Neferhotep at Thebes*, New York, 1933, pl. LI.
- (25) Helck, *Verwaltung*, 295.
- (26) アメンヘテプ III 世のマルカタ王宮からカエムハトの名前を含むヒエラティック・インスクリプションの書かれたワイン壺の破片が出土している。治世第34年の第2回セド祭については, W. C. Hayes, "Inscriptions from the Palace of Amenhotep III," *JNES* 10 (1951), fig. 12, no. 161, 160. 治世第37年の第3回セド祭については, *Ibid*, fig. 11, no. 140 を参照。
- (27) JdE 2809. C. M. Zivie, *Giza au deuxième millénaire*, IFAO, Le Caire, 1976, 177-182, pl. 13 を参照。
- (28) J. J. Clère, *Les cauves d'Hathor*, OLA 63, Leuven, 1995, 211-215.
- (29) R. Schultz, *Die Entwicklung und Bedeutung des Kuboiden Statuentypus*, Band II, HÄB 34, Hildesheim, 1992, 687.
- (30) H. Ranke, *Die Ägyptischen Personennamen*, I, 16, no. 8.
- (31) Kampp, *op. cit.*, 244-247.
- (32) D. Arnold, *Grabung im Assasif, Bd. 1, Das Grab des Ini-Itj. f.*, Mainz am Rhein, 1971, 39.

- (33) C. H. Roerig, “The Early Middle Kingdom Cemeteries at Thebes and the tomb of Djari,” in J. Assmann et al. (eds.), *Thebanische Beamtennekropolen*, SAGA 12, Heidelberg, 1995, 255-269 を参照。
- (34) M. Wegner, *MDIK* 4 (1933), 42.; G. D. F. van den Boorn, “On the Date of “The Duties of the Vizier,” *Orientalia* 51 (1982), 376, nn. 45, 46. を参照。代表的な例としてはデル・アル＝バハリの中王国時代のメンチュヘテプII世記念神殿を模倣した第18王朝のハトシェプスト女王記念神殿がある。
- (35) E. Dziobek, “The Architectural Development of Theban Tombs in the Early Eighteenth Dynasty,” in Assmann et al., *Problems and Priorities in Egyptian Archaeology*, London and New York, 1987, 78-79. なお、テーベネクロポリスの岩窟墓の再利用については、近藤二郎「ネクロポリス・テーベにおける岩窟墓の再利用の問題」、『史観』第142冊、2001年、76-91頁を参照。
- (36) Roerig, *op. cit.*, 258, fig. 2, 259.
- (37) Kampp, *op. cit.*, 244-246.
- (38) *Ibid.*, 21-23, 111-116.
- (39) *Ibid.*, 114-116.
- (40) *Ibid.*, 22-23.
- (41) Dziobek, *op. cit.*, 72-3.
- (42) Kampp, *op. cit.*, 31-32.
- (43) *Ibid.*, 244.
- (44) 碑文は次のように記されている。 *ḥsy n ntr nfr n k} n sš nsu m' mr. f imy-r pr m t} ḥwt p} 'Im, R' -ms, m} (-hrw, ḥsy Hwt-ḥr, šm}yt n ('Imn Nfrt-ḥ'w)* 「良き神に称えられし者よ。真の王の書記、アテン神殿の家令、ラーメス、声正しき者とハトホルに称えられし者、(アメン神)の歌い手、(ネフェルトカア)、声正しき者のカーのために。」
- (45) P. Der Manuelian, “Semi-Literacy in Egypt: Some Erasures from the Amarna Period” in E. Teeter and J. A. Larson (eds.), *Gold of Praise: Studies on Ancient Egypt in honor of Edward F. Wente*, Chicago, 1999, 285-298 参照。
- (46) たとえば、サッカーラのトゥトアंकアメン王の治世の高官バアイの墓では「太陽神への賛歌」の中でアテン神への祈りの言及がある。H. D. Schneider et al., “The tomb complex of Pay and Ra'ia: Preliminary report on the Saqqara Excavations, 1994 Season,” *OMRO* 75 (1995), 20.
- (47) セティ I 世の治世のパピルス Rollin 213番に *t} ḥwt p} 'Im* 「アテン神殿」の記述がある。B. Löhr, “Ahanjꜣti in Memphis,” *SAK* 2 (1975), 146-147 を参照。
- (48) 例えば, E. Dziobek, *Das Grab des Ineni Theben Nr. 81*, Mainz am Rhein, 1992.
- (49) N. de G. Davies, *The Tomb of Neferhotep at Thebes*, New York, 1933, vol. I, pl. L, vol. II., pl. VII.
- (50) N. Strudwick, “Change and Continuity at Thebes: The Private Tomb after

Akhenaten,” in C. Eyre et al (eds.), *The Unbroken Reed: Studies in the Culture and Heritage of Ancient Egypt in Honor of A. F. Shore*, London, 1994, 326.

(51) N. de G. Davies, *The Rock Tombs of El Amarna*, I, London, 1903, pl. XXII.

(52) Sturdwick, *op. cit.*, 325.

図1. TT 46 周辺図

(F. Kampp, *Die Thebanische Nekropole*, Mainz, 1996, Teil II, Beilage. Plan III を改変)

図2. TT 46 平面略図

(F. Kampp, *Die Thebanische Nekropole*, Mainz, 1996, Teil I, Fig. 143 を改変)

図3. TT 46. 前室残存レリーフ

図4. TT 46. 柱に描かれたラーメス

図5. TT46. 奥室 オシリス神に供物を捧げるラーメス

図6. アイ王の治世第3年のステラ (JdE 2809)

図7. ラーメスの家系図